

いもう 葦毛通信



ハルリンドウ

平成 27 年 4 月 30 日
豊橋市文化財センター
TEL : 0532-56-6060

No. 21

1、2015 モニタリング報告ー1

葦毛湿原では、ハルリンドウが盛りを過ぎ、ミカワバイケイソウが開花しています。また、クロバイ、ヤブデマリ、アズキナシ等の木が花をつけています。

昨年度の作業でL・M・N・J地点は明るい森になり、大きく変わりました。明るくなることにより、すでに色々な変化が見られます。最も大きな変化は、ミカワバイケイソウが増えたことです。これまでは、木道沿いのやや明るい所にわずかに見られ、暗いためかあまり開花しませんでした。木を伐って明るくなり、50本程度の群落が明るくなった沢沿いに行くとも見られるようになりました。小さな個体が多く見られるので、今年新たに発芽したものが多く含まれているものと思われます。

また、明るくなった沢の木道沿いにカザグルマが多く発芽しています。今年は開花しないと思いますが、これから大きくなれば2～3年後にはたくさんの花を咲かせてくれるでしょう。

地上絶滅していたと考えられる種も復活しています。30年以上前から確認できていなかったサワオグルマや、10年以上前から確認できなくなっていたシラコスゲが復活しました。いずれも、昨年度に木を伐採して明るくなった森の中の湿地です。



ミカワバイケイソウ(4月25日)



クロバイ(4月25日)



ヤブデマリ(4月25日)

また、作業を行った各地点では、ヤチカワズスゲが目立つようになり、ミズギボウシが増えました。明るくなることにより、多くの植物が埋土種子から発芽してくるようです。

ショウジョウバ カマ

明るくなった林内のあちこちで発芽しています。開花したものは少なく、新たに芽を出したものが目立ちますが、来年には多くの花を咲かせてくれるでしょう。



復活したシラコスゲと小穂(4月25日)

ハルリンドウ

ネザサを刈り取ったところやヌマガヤ群落の中に特に多いようです。今年は昨年よりやや開花数が少ないようですが、4月18日には、1,999輪の開花を確認しました。ハルリンドウも年ごとに開花のばらつきがあるようです。以前見られたところで見られなくなったところもあります。これまでは、はっきりとした開花数の記録はありませんが、最も多い時で、4,500輪程あったということです。これから開花数の調査を続けていくつもりです。

ミカワバイケイソウ

ミカワバイケイソウは、4月25日の観察で、昨年度の作業で明るい森にしたL・M地点と平成24年度に最初に作業を行ったD・E地点だけで735本が、葦毛湿原指定地全体では808本が確認できました。このうち、開花しているのは22本だけで、今年は開花しているものは多くありません。ミカワバイケイソウの開花は一定ではなく、今年の当たり年には多くの花を咲かせました。ミカワバイケイソウは、これまで葦毛湿原の指定地内には少ないという意見もありましたが、明らかに増えていると思います。今年発芽したような小さな個体が目立ちますが、2～3年後にはたくさんの花をつけてくれると思います。

ヤチカワズスゲ

平成24年度に、最初に作業を行ったD地点では、作業後すぐに発芽して、次の年には数が増えました。今年は湿原の各地点で目立つようになりました。ヒメヒカゲの食草とされており、以前は各地点で見られたそうです。ヒメヒカゲのためにも、各地点でさらに増えてくれることを願っています。



ヤチカワズスゲと小穂(4月25日)

2、バックホーによる作業－3

1) 抜根作業の内容と問題点

抜根作業はバックホーのバケットで切り株をつまみあげる形で行いました。小さな切り株はそのまま剥がれましたが、大きな切り株は周囲に広く根を張っているため1回ではつまみあげることができません。そこで、根の両側を少し掘って横に伸びる根を切断してから中心部をつまんで引き上げるようにしました。大きな切り株の場合、やや深く攪乱が入ることになります。

葦毛湿原では木の根は下に向かわず、横に広く伸びており、かつ周囲の木の根と絡み合っています。太い根だけではなく、細いひげ根も絡み合って厚いマット状になっていました。このマットは、小さな木なら10 cm程度、大きな木なら30 cm程度の厚さがあります。このマットの中は湿っていますが、常時水につかっているのではなく、多くの空気を含んだフカフカの腐葉土層になっています。この根の層があるため雨が降っても腐葉土が流れていかないようになっています。葦毛湿原は、礫がゴロゴロしている裸地の上に常時水が流れているような環境が特徴の湿地です。かつて良好な湿地だったところが森林化し、木の根が厚くマット状に上に乗っているため湿地性植物が発芽できる環境ではなくなっています。つまり、木を伐っただけでは、元の湿地には戻らないので、根を除去して、埋まってしまった湿地を掘り出しているのです。

また、抜根はできる限り根だけを除去するようにして、土はできる限りその場所に残すようにしています。これは、堆積した土の中に埋土種子が含まれている可能性が高いと判断しているからです。良好な湿地から森林へと遷移していく段階で様々な環境の変化が見られたと思います。湿地からいきなり森になったわけではないはずですが、つまり、様々な植物が発芽して土の中に種子を残している可能性があります。どのような植物が種子を残しているのかは分からないので、根を除去して、雨にたたかされて土が流れていく状態を造って、土が流れて裸地化するところ、あまり流れていかないところ、ある程度流れて薄い表土層を形成するところ等、様々な環境が自然に創出されることを期待しています。

2) ネザサの根の除去の問題点

ネザサの分布パターンを見ると、森の深い内部は暗いためか、あまり目立ちません。ま



大きな切り株を抜根した(剥がした)ところ
複数の木の根が絡み合いマット状になっている



大きな切り株の横を掘り下げたところ
表土層下の黄灰色砂礫層が見えている

た、裸地の湿地内部にも見られませんが、裸地の湿地内部にも見られませんが、湿地内の乾燥化した島状部や湧水線付近に出現し、湿地内部に分布を広げていくようです。ネザサの根もマット状になっていますが、木の根より薄く、5～10 cm程度の厚さです。特に、湧水線に沿っているところの根の層は砂礫を含み、湿っています。これまで、何カ所かで部分的に除去する実験を行っていますが、ネザサの根を除去するとその場所は雨にたたかれて土が流れすぐに裸地化します。つまり、裸地状態にリセットするということになります。これにより、シラタマホシク



ネザサの根を剥がしたところ
砂礫層の上にマット状に堆積している

サやミカヅキグサが少数復活してきたことが、K-1 地点等の実験区で確認されています。

また、根を除去せずに除草しただけのところでも、ネザサが成長していない春先には明るくなることによりハルリンドウが増えるという良い影響も見られます。特にハルリンドウはネザサの根がマット状になったところやヌマガヤ群落のところに見られ、裸地には見られません。ハルリンドウのためにはネザサの根は完全に除去するのではなく、除草するだけのところも必要ようです。

しかし、ネザサの根がマット状に広がっているところは、乾燥化しており、刈っただけでは湿地状態にはなりません。また、湧水線近くに沿って面的に分布しているので、湧水に蓋をして、地表に流れ出るのを妨げていると考えられました。そこで、湧水線近くに分布するネザサについては、バックホーにより剥ぎ取りを行いました。剥ぎ取った土は、ネザサがあったところのすぐ上に播き出しています。雨にたたかれて埋土種子が流れ出しても湿地に入ることができるように、また、播き出した土からどのような植物が発芽するのかも観察していきます。

(バックホーによる作業は以降に続きます。)

ナガバノイシモチソウ が発芽しました。

4月27日(月)に今年初めての、豊橋市指定天然記念物のナガバノイシモチソウの発芽を確認しました。大きさは3ミリ程です。

これから数が増えていき、6月末頃には開花し始め、10月下旬頃まで開花し続けます。昨年度の大規模植生回復作業により、自生数が回復していくものと期待しています。



発芽したナガバノイシモチソウ